

故 保利茂氏に対する自由民主党葬における弔辞

(昭和五十四年三月九日)

本日、ここに、前衆議院議長 従二位勲一等故保利茂先生の自由民主党葬が行われるに当たり、謹んでお別れの言葉を申し上げます。

保利先生

先生は、自らのご生涯を議会政治一筋に生き抜かれ、数々の足跡を残されました。そして、われわれ後輩にとっても、文字どおり、かけがえない政治の師であり、力強い指導者でありました。今日、わが国は、内外ともに歴史的な転換期に際会し、その舵をとらねばならぬ政治もまた、かつてない試練に直面しております。先生の高い見識、鋭い先見性、強靱な実行力、厚い情誼に満ちた人間味こそは、今日の政治が求めてやまぬ貴重なものであります。

しかるに、天は、非情にも、このかけがえない宝を、われわれから奪ったのであります。われわれは、いま、ここに生じた空白の大きさを思い、茫然として天を仰ぎ、天意のはかり難さに慨歎するばかりであります。

保利先生

先生は、明治三十四年、佐賀県唐津市に生をうけ、中央大学経済学科を卒業後、一時、新聞界に身を投じられましたが、やがて農林大臣秘書官をへて、昭和十九年、郷党の衆望を担って衆議院議員に初当選して以来、実に当選十二回を重ねられました。

その間、吉田内閣では、労働大臣、官房長官、農林大臣、池田内閣では、自民党総務会長、佐藤内閣では、建設大臣、官房長官、自民党幹事長、さらに田中内閣では行政管理庁長官など、党、内閣にわたる要職を歴任され、その時々々の政権を支える主柱として、数々の偉功を残されました。なかんずく、サンフランシスコ講和条約の締結と、沖繩返還協定の実現に示された卓抜した先生の政治手腕は、いまなお政界の語り草になっております。

さらに、前後三十五年に及ぶ先生の輝やかなしい政治生活に、錦上添花を添えたのは、昭和五十一年十二月、第五十九代衆議院議長に就任されて以来の二年一カ月でありました。

与野党議席の伯仲という、困難極まりない状況下にありながら、「百術は一誠にしかず」の信念の下に、相互の信頼と理解を以って、与野党間の話し合いに徹し、わが国議会上、かつてない見事な国会運営を全うされました。晩年いよいよ枯淡、円熟の境に達した先生の議長としての手綱さばきは、まさに名優の至芸とも言つべきものであります。

保利先生

先生はまた、戦後三十有余年にわたる保守党の守護神でもありました。わが自由民主党が、いくたびか危機にさらされることに、つねに先生は、燃ゆるがごとき愛党の精神のもとに、身を挺してその危機打開

に当たり、わが党の安泰を支えられたのであります。しかも、その間、先生は、つねに栄光は竟に、成功は人に、自らは恃むところなき境涯に甘んずるところがあつたのであります。これは、よく凡人の為し得るところではありません。

いま、われわれは、その先生を失つたのであります。痛恨、その言葉を知りません。

保利先生

名残りは尽きず、哀惜の念に限りはありません。倦むことなく国政に奉仕された貴方は、三十五年にわたる政治生活をいま静かに閉じようとされております。それは、正にきびしい風雪の旅路であつたと思いますが、戦後政治史に鮮やかな光芒を描く傑作の生涯であつたとも思います。

保利先生

貴方は、いま、安息の時を得られました。後事の一切はわれわれに託して、安らかにお眠り下さい。

故 成田知巳氏に対する追悼演説

(昭和五十四年四月十日 衆議院本会議)

ただいま、議長からご報告がありましたように、本院議員成田知巳君は、さる三月九日未明、国立東京第二病院において逝去されました。まことに痛惜の念に堪えません。ここに、私は、諸君のご同意を得て、議員一同を代表し、謹んで哀悼の言葉を申し述べたいと存じます。

成田君

君は、しばしば、この壇上で、日本社会党を代表して、雄渾な論陣を張られました。君の無造作な髪型と濃紺の背広が特に印象的でした。その論旨は、整然たるものがあり、学究的で、若々しく、何の気どりもない淡々たるものでありました。六十六歳といえは、なお春秋に富み、これからこそ円熟した仕事が期待されていた君でありました。しかるに、何の予告もなく天は君を奪い去り、私は、この壇上から君に対する追悼の辞を述べなければなりません。この無情な天の仕打に対し、やり場のない怨みを覚えざるを得ないのであります。

成田君

私が、昭和二十七年秋、初めて本院に議席を得た時、君は、すでに社会党のホープと目されておりました。

た。その後、君は、常に日本社会党とともにあり、その指導者として党の栄光のために生き抜かれました。また、その間、君は、終始輝ける衆議院の星として、その鋭い政権批判を通じて日本の平和と民主主義のために尽されました。死の床にありながらも、社会党を思い、日本民主政治の行く末を案じられたと聞いております。しかるに君は、国から期待される最高の榮譽も、党から贈られる党葬の礼も、悉くこれを辞退されて、一野人として黙々と去っていかれました。まことにさわやかで清楚な最後でありました。

成田君

君は、大正元年九月、香川県高松市の名家に生まれ、旧制高松中学から旧制第四高等学校を経て、東京大学法学部に進み、昭和十年卒業されました。卒業後は直ちに三井鉱山に奉職されましたが、入社後六年にして、早くも君は、三井鉱山から独立した三井化学の文書課長に抜擢され、実業人エリートとして多幸なスタートをきられたのであります。しかし、昭和二十年八月に迎えた終戦は、君の中に眠っていた政治家としての君の本領を触発させたのであります。君は昭和二十二年四月の総選挙で、香川県一区から出馬して当選し、新憲法下初の国会に光栄ある議席を得られました。爾來、連続当選すること十二回、在職実に三十二年一カ月に及びました。

成田君

君は、早くから社会党にあつてその能力と指導力とを期待され、その要職のほとんどを歴任されました。昭和三十七年には書記長に、昭和四十三年には第七代中央執行委員長に選ばれ、実に九年二カ月の長きにわたつてその職を全うされました。しかも、そうした要職は君が自ら求めたものではありませんでした。

書記長就任に当たり、「私は書記長の器ではない。背のびして世の中を渡っていくのはむしろ苦痛である」として、最後まで固辞し続けられたと聞いております。しかし、社会党は、君が書記長としてあるいは委員長として党を率いることを要請し続け、君は党のため己を空しうして挺身されたのであります。わが国の戦後政治は、野党第一党たる社会党の歴史を抜きにして語ることはできず、社会党の歴史は、その指導者であった君を抜きにして語ることはできません。かくて君は、はしなくも終始わが国の戦後政治における主役を演じ続けられたのであります。

成田君

君が社会党の書記長になられた前々年には左右社会党の統一があり、前年には労働党の合流をみて、いわゆる革新勢力は社会党に収斂されつつありました。一方、この情勢に呼応するかのよう自由党と民主党の間に保守合同が実を結ぶことになりました。こうした一連の収斂過程によって、二大政党を中核とする、いわゆる五十五年体制はわが国の土壌に定着するかにみえた時代でありました。

しかるに、その後の歴史の流れは期待された軌道を大きく離れ、経済社会は空前の地殻変動を招き、急速な経済成長と都市化が進み、国民の意識や生活にも大きい変化が見られるに至りました。これを承けて政界における多党化も急速に進み、構造改革をはじめとする、いわゆる路線論争が多彩に展開されるようになりました。かつて、権威を誇示したイデオロギーは色褪せ、にわかには現実路線が強まってまいりました。そして君の率いる社会党の行方が最大の国民的関心を集め、君のとるべき態度が注目されておりました。その間にあって、君は、勇を鼓して「成田三原則」を提示し、いわゆる革新の大義、全野党の政権構

想を唱えられたのであります。君が選択された路線は、社会党内においてさえ振幅のはげしい論議を生んだばかりでなく、党勢の消長にも大きい影響を生むに至りました。しかし君はひるむことなく、自らの立場を貫き通されました。

一方、国会を中心とする日本の民主政治も、多党制の下、空前とも言つべき内外の転換期に処して、平和と国民生活を守るため多くの困難な課題に取り組み、苦闘を重ねております。その中であつて、君は、始終社会主義を通ずる平和と民主主義の実現を目指して、たゆまざる努力を重ねられたのであります。その道はけわしく、その成果も期待された程ではありませんでした。しかし君は、真実一路、自ら選んだ道を一貫して歩み抜かれたのであります。私はそこに君の政治家としての、また人間としての真骨頂を見ることができるよう思います。

成田君

かくて君の休息を知らぬ忍苦と精進の一生は、社会党の指導者として栄光に満ちたものであつたが、日本における社会主義の躍進を記録するには、その道未だ半ばにあつたといわねばなりません。しかし、人生の値打ちは、その人の手がけた事の成否によつてのみ定まるものではなく、それに取り組んだその人の真剣さにこそよるものであるといわれております。

民主政治においては、結果よりも過程が尊いものであるといわれております。君はいつとここの革新の大義を実現することに成功したとは言えません。しかし、君は社会主義者として、その大義の実現に向かつて日夜真剣に闘い抜かれたのであります。古語に「初め有らざるなし、克く終わりある少し」といいま

す。死に至るまで自らの思想と信念に忠実に生き抜かれ、よくその終わりを全うされた君の人生は美しいものであり、見事な傑作であったと思います。

成田君

君と私は、郷里を同じうし、郷里讃岐に共通の愛情と共通のかかわりを持ち続けてきました。君は郷里の仕事であればその大小に拘らず、自らの立場を離れて、私に依頼してくれました。君と私は讃岐の山野や海浜を、工場や街頭を隈なく歩き、たびたび激しい論争を闘わすこともありました。しかしすべては、いまでは甘美な思い出になってしまいました。二人の間は政治的立場や信条を異にし、遂に政治的同志になる機縁をもつことがありませんでした。君は上戸で私は下戸で親しく酒杯を交す機会もありませんでした。しかし、その間、常にお互いの信頼と尊敬の念だけは持ち続けることができたように思っております。私はそれを得難い倖せと思ひ、いつまでも大切に持ち続けてまいるとも思ひます。

成田君

私どもは、最早、この議場に君の英姿を見ることはできません。堂々たる君の演説を聞くこともできません。しかし、君の歩まれた軌跡は戦後の政治史上に燦とした光芒を放っております。君に対する敬慕と欽仰の情は、日本社会党の同志ばかりでなく、ここに集まる同僚議員一同はもとより、広く国民の間に永く生き続けることでありましよう。ここにありし日の君の徳を偲び、君の素晴らしい生涯を讃え、いまはただ君の安らかな休息を祈って、追悼の言葉をいたします。

故 船田中氏に対する自由民主党葬における弔辞

(昭和五十四年四月二十六日)

船田中先生の自由民主党葬が挙行されるに当たり、謹んで先生の靈に、お別れのご挨拶を申し上げます。

激しかった地方選挙の余燼がいまださめやらぬ四月十二日夜八時前、私は、先生の突然の訃報に接しました。さきに保利茂先生を失い、いままた先生を奪われ、巨星また落ち、やり場のない寂寥感にうたれたのであります。

船田先生

貴方は、生前こよなく桜を愛されました。桜に日本の美の極致を見られたのでありましょう。明治、大正、昭和の三代、八十三年にわたる貴方の生涯は、巨大な桜の古木に似ておりました。桜の古木は、時の重みに耐えて、風雪を凌ぎつつも、節を屈することなく、くる春ごとに美しい花を咲かせるものです。

「明治の人間」と自称された貴方は、古きよき日本の象徴的存在でありました。公私を分かたずに峻厳であり、出処進退を誤られることなく、信念を貫くに剛直でありました。常に端然として時流を洞察し、理

非を糺し、国土ともいふべき風格を偲ばせるものがありました。

船田先生

貴方は、明治二十八年四月、宇都宮市の教育者の家に生まれ、幼時より英才の誉れ高く、旧制一高、東大を首席で卒業し、大正七年内務省に奉職されました。官界においては早くより頭角を現わし、若くして内閣書記官、東京市助役の要職を歴任されました。

大正十三年、ご尊父船田兵吾先生が逝去され、それを契機としてご両親が心血を注いで経営に当たられていた作新学院は、存廃の危機を迎えるに至りました。貴方は、遂に昭和四年、官界での多幸な未来を擲げうち、「どうか、おれの身を浮びあがらせてくれ」というご尊父のご遺志に添うべく、政界に打って出る決意をされました。それは、貴方が三十四歳の春であつたと聞いております。

翌昭和五年、第十七回総選挙に際しては、貴方は、栃木県一区から出馬して栄冠を獲得し、爾来、当選すること十五回、在席すること実に四十一年九カ月の長きに及び、その間、常に政治の中枢にあつて国政に参画されたのであります。

昭和三十年、鳩山総理に内閣を請われるや、自ら求めて初代防衛庁長官に就任し、極めて困難な情勢の中で、わが国の防衛体制の基礎固めをされました。貴方は、その後も日米関係、とりわけ安全保障をめぐる日米協力には特別の関心を持たれ、在日米軍幹部を中心とする米国の友人の方々との醇厚な交際は、終生かわるところがありませんでした。

貴方の多彩華麗な足跡の中で、特筆されるべきものは、第五十一代と第五十六代、再度四年十九月にわ

たり、衆議院議長の重責を担われたことであります。その間、一七〇八十七号条約、日韓友好条約、沖縄返還協定等、重要案件の批准をはじめ、わが国の戦後を画する数多くの案件を成立させ、国政の進展に偉大な業績を残されたのであります。

船田先生

また貴方は、政界の重大な変革の場面には常に登場し、余人では為し得ない役割りを果たされました。困難な事態にありては、天は、その任にふさわしい人を選ぶものであると言われております。貴方は、そうした天の期待に一度もそむくことなく、筋の通った事態の收拾に当たられ、そして成功を収められたのであります。

歴代の内閣は、貴方に、主要閣僚として入閣し、その才幹を振うことを期待したのでありますが、貴方は、そのたびごとに「議長経験者は副総理格といえど入閣すべきではない」と固辞し続けられたのであります。それは、公人としての進退に終始筋を通された貴方の真骨頂を示すものであり、貴方が「憲政の神」とうたわれた所以であると思えます。

さらに貴方は、政局の安定を何よりも重視され、党の運営と党勢の伸張に力をいたされました。自由民主党外交調査会長、政調会長等数々の重職を歴任し、昭和五十二年には党副総裁の要職を引き受け、親しく私たち後進を指導し、常に大局に立って誤りなきを期されたのであります。

いまや時代の流れは、いよいよ峻しく、国の内外には難問が山積しております。透徹した見識と豊富な経験に加うるに磨きぬかれた英知を備えられた貴方を失うことは、わが党のみならず、邦家の一大損失で

あります。かけがえのない人を失った思いに、われわれ後進のもつ痛恨の情は、何をもって埋めることができませぬ。

貴方は、また、国際人として知られ、英語、ドイツ語をよくされ、昭和四年からはじまる外遊歴は、数知れませぬ。米軍極東軍最高司令官レムニツァー大將、故蔣介石總統等との交友は、人間的信頼関係にまで発展し、わが国外交のため測り知れない貢献をされました。

これらの偉大な功績により、昭和四十年にはかしこきあたりより勲一等旭日大綬章、さらに四十八年には旭日桐花大綬章を受けられ、また逝去にあたっては従二位を追叙され、金盃二個を賜ったのであります。

船田先生

貴方は、優れて郷土愛の深い方でありました。特に、ご尊父より受け継がれた作新学院との関係は、格別であり、「一校一家」の校風は淳美をきわめ、貴方は、生徒を見ること孫の如く、終生渝ることのない慈愛を注がれたのであります。

船田先生

貴方は、その全力を振り絞って自らの信ずるもののために尽瘁され、天から課せられた使命を余すことなく果たされました。その生涯は、純一であり、その人格は、高潔でありました。そしていま、桜の花が散る如く、静かに去られた貴方であります。いま漸く貴方はこよなく愛した栃木の山河に、安らかに休息をとられることになりました。ここにありし日の俤を偲び遺徳を欽慕し、お別れの言葉といたします。

故 椎名悦三郎氏に対する自由民主党葬における弔辞

(昭和五十四年十月三十日)

本日ここに、故椎名悦三郎先生の自由民主党葬が執り行われるに当たり、謹んでご霊前にお別れのご挨拶を申し上げます。

第三十五回総選挙の終盤近く、九月三十日早朝、私は、遊説先の福岡で、先生の訃報に接しました。かねてから入院加療中とは聞いていたが、煩をさけてのご静養のように信じていた私は、その瞬間、われとわが耳を疑ったことでありました。しかし、いよいよそれが動かし難い事実となってくるにつれて、私の心は大きい空虚を感じざるを得ませんでした。さきにわれわれは、保利、船田両先生を失い、いままた椎名先生までも失ったことの重さを思い、救い難い虚脱感におそわれ、暗然として為す術を知らない状況でありました。落日秋山を蔽い、萬象悉く呼吸を止めた思いでありました。

椎名先生

思えば、貴方は、われわれにとって、文字通りかけがえない人生の導師であり、政治の指南役であられました。貴方は、日常多くを語られなかったが、物事のコアをついた鋭い警句、大らかに屈託のないユーモアでわれわれを魅了されておりました。しかし、ひとたび大事に臨んでは、よく大局を見通して、山

を移すにも似た大きな決断を下し、いくたびか錯綜した事態を打開し、政局の危機を救われました。それは、貴方の鋭い洞察力、公人としての責任感のいたすところであり、無私の人のみが示し得る大勇であり、俗流のよく窺知することのできない非凡な大器でなければよくなし得ない至芸ともいうべきものでありました。寒梅のような清さと威厳に満ちていた貴方は、事に処するに極めて淡々とされていたが、人を遇するに情誼に篤く、行き届いた親切な人でありました。わが政界の一角に高く光彩を放つ巨星として、広く畏敬され、敬慕されておられました。

現下内外の情勢は極めてきびしく、われわれが最も貴方を必要とするときに、非情にも天は貴方をわれわれの手から奪い去りました。われわれの痛恨の念、哀惜の情は、そのやり場をもっていないのであります。

椎名先生

貴方は明治三十一年、岩手県水沢市に生まれました。貴方は、江戸末期の著名な蘭学者・高野長英の血を承け、明治、大正を通ずる政界の巨星・後藤新平を叔父に持つておられました。大正十二年、東京大学法学部を卒業後、旧農商務省に入り、農林、商工両省に分割後は、一貫して商工行政を担当し、戦前、戦中の激動期に、わが国産業政策の立案と遂行に大きい役割を果たされました。また、昭和八年から約六年間は、満州国の経営に当たられ、いまは見果てぬ夢とはなりましたが、広漠たる満州の野に壮大な経綸をふるわれたのであります。

かくして、磨き抜かれた貴方の稀有の才幹は、昭和三十年の政界進出とともに見事に開花し、結実する

に至りました。岸、池田、佐藤、田中、三木の五代の内閣にわたり、内閣官房長官、通産大臣、外務大臣、自由民主党政調会長、総務会長、副総裁など政府、与党の要職を歴任されました。その間、貴方は「不如省事」の哲学に徹し、小事にこだわらず、つねに大局を把握して数々の偉功を残されたのであります。

岸内閣の官房長官として、六〇年安保騒動の乗り切りに示された才腕、池田内閣、佐藤内閣の外相として、日韓国交の樹立に示された業績、党の改革に燃やされた情熱といくたの提言等は、なお、われわれの記憶に新たなものがあります。

とりわけ忘れ得ないのは、昭和四十九年末、田中内閣退陣後の事態收拾に際し、副総裁として示された「椎名裁定」であります。その政治手法は枯れて、いふし銀にも似た光沢を放ち、まさに完璧な芸術品を見る思いがいたしました。

椎名先生

かくして貴方は、八十一年に及ぶ生涯を見事に完結させ、いま永遠の眠りにつこうとされております。幸いにして、貴方が残された政治的遺志は、令息素夫君が引き継ぐことになり、郷土の同志の支持を得て、見事なスタートをきられております。われわれもまた、貴方の遺志を体し、省事を中核とする政治倫理の確立に努め、貴方の期待に応える決意をしております。

ここに在りし日の先生の徳を偲び遺徳を追慕しつつ、お別れの言葉といたします。

椎名先生、安らかにお眠り下さい。

故 中山伊知郎氏の葬儀における弔辞

(昭和五十五年四月二十三日)

本日ここに、故中山伊知郎先生の葬儀が執り行われるに当たり、謹んでご霊前にお別れのご挨拶を申し上げます。

私は四月九日の夜、先生の訃報に接しました。最近、入院加療中とうかがってはありましたが、ご容態は快方に向かい、煩を避けてのご静養と信じていた私は、この思いがけない報せに、呆然として自失するていでありました。昨年七月の物価安定政策会議において、先生は、いつもの通り整然とした座長ぶりを示され、いよいよ正念場を迎えようとする物価政策に、政府の真剣かつ周到な対応を求められました。その先生が突如他界されようとは、私にとっては到底信じられない衝撃でありました。

ノーブルで威厳に満ち、あたたかい親切と軽妙なユーモアを忘れられなかった先生を、春に背いてわれわれの手から奪い去った天の非情さに、やり場のない憤りすら覚えざるを得ないのであります。

先生は、明治三十一年、三重県伊勢市に生をうけられました。早くから英才の誉れ高く、宇治山田中学から旧制神戸高商を経て一橋大学に進まれました。ご卒業後は、母校の教授として、後には学長として、終始母校のために尽され、大学の内外から広く敬慕されておりました。

私自身、先生が新進気鋭の助教授当時、経済原論の講筵に侍る機会に恵まれました。純粹経済学の体系構築に精根を傾けられていた当時の先生の齒切れのよい講義は、われわれにとっては待ち遠しい魅力あるものでありました。

先生は、恩師シュンペーター教授の流れを汲み、わが国における近代経済学の先駆者として経済学界に大きい功績を残されました。先生の学位論文「発展過程の均衡分析」は、経済の発展過程のすぐれた分析であり、「安定と進歩の条件を探索するのが経済学の本来の目的である」という先生の洞察は、経済学を志すわれわれにとっては力強い指針でありました。

同時に先生は、理論と実践の一致を求められ、研究室のみに止まることなく敢然と行動を起こされた方でもありました。戦後のわが国経済社会の復興、発展は、先生の存在を抜きにして語ることはできません。とりわけ、戦後、労使の関係が激しく揺れ動いた時期に中央労働委員会会長として文字通り粉骨碎身されました。公正で均衡のとれた先生の判断により数々の大争議が見事収拾・解決に導かれたことは、いまなお記憶に新しいところでもあります。最近のわが国の労使関係は、諸外国にその例をみないほど健全な歩みが続けておりますが、これこそは、労使の信頼を一身に集められた先生の永年にわたるご指導が開花し、結実したものに外ならないものであると信じます。

先生はまた、戦後における歴代政府の政策の立案形成に参画され、ここにもまた大きな足跡を残されました。物価安定政策会議をはじめ、税制調査会、運輸政策審議会の議長又は会長など数多くの公職に就かれ、つねに真剣にその責任を果たされた先生の態度は、各方面から高い評価と深い尊敬を受けられました。

さらに先生は、外にあっては、その天賦の資質と優れた国際感覚とにより、ユネスコ、ILOをはじめ、数々の国際会議においても縦横に活躍されました。

先生は、生前、その優れた学術的業績によって文化功労者に選ばれ、また、このたび、その内外における数々の功績をよみせられ、かしこぎあたりより従二位に叙され、旭日桐花大綬章を加授されましたことは、誠にむべなるかなと思います。

われわれは、いま内外にわたり新たな改革と対応とが厳しく求められております。「暮春すでに春服成る」という先生が愛好された言葉は、事に先んじて備えるところがなければならぬいまの時代においてこそ、われわれが肝に銘ずべき教訓であると信じます。われわれは、先生が身を以て示されたその洗練された思想と実践を道標として、新しい時代の開拓に取り組み、先生のご遺志にこたえてまいりたいと思いません。

中山伊知郎先生。いま先生を送るにあたり、八十一年のご生涯に不滅の光芒を放たれた先生のご遺徳を欽慕しつつ、先生のご冥福を祈って、お別れのご挨拶といたします。